
むちやぶり同好会(弟君をいじりたおそう会)

kaji

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

むちやぶり同好会（弟君をいじりたおそう会）

【Zコード】

Z9731G

【作者名】

ka.ji

【あらすじ】

姉に今まで色々な迷惑をこうむつて来た鏡橋星矢かがみはしせいやはある日突然同好会を作るからと言われ、放課後に教室に来るようになると言われた。これが星矢の死亡フラグだった。

僕の名前は 鏡橋星矢。中の端学園の一年生だ。僕には同じ学園に通つて いる一つ上の姉さんがいる。名前を 鏡橋楓夏 といつ。僕の姉さんは人目を引く派手な顔立ちで姉のことをこういつのは何だが 美人部類に入ると思つ。学校にいるときは常に笑みを絶やさず僕は友達からはあんな姉ちゃんがいて羨ましいなどと言っていた。一見良い姉に見えるのだが姉さんは僕と一部の人間にだけ本当の本性を表すのだ。

その姉がある日同好会を作ると言つ出した。

「あなたも部員だから必ず来てね。言つとくけど拒否権はないから

姉さんはいつもこうだ。いつだつたかも某有名アイドルグループに勝手に応募して間違つたのか何なのか分からぬけど書類審査を通過してしまつて面接に行かなれば行けなかつた。姉さんは星矢なら絶対合格するから自身持つてとか言つて根拠不明の説得をしてなんとかして僕を行かせようとしてきたが、その時はなんとか姉さんの手から逃れてなんとかその時は回避した。家に帰ると怒つていると思ひきや

「私だけの星矢でいてくれるのね

なんて分けのわからないことを言い出して抱きつこうとしてきた。僕はもちろん避けたのだが。

またある日は自転車で日本一周旅行するからと唐突に言い出した。私が後ろに乗るから星矢が漕いでねという無茶なことを言い出した。僕は必死に抵抗したのだがなぜか母さんがノリノリで無理やり僕た

ちを旅に出した。結局僕はその日の夕方にダウンして自転車を置いて電車で帰ってきた。その翌日から僕は1週間40度の熱が出て死にそうになつた。

姉さんはその時はさすがに悪かつたと思つたのか

「『めんね。まさかこんなにひ弱だと思わなかつたの』

といつて看病してくれた。母さんはそんなひ弱な子に育てた覚えはありませんと泣いていた。

とにかく姉さんは面倒じとを僕に押し付けてくる。僕は本当に行きたくなかった。でも

「来なかつたら今日のご飯は姉さんが作るからね」

といつて脅して來るのでしぶしぶ指定の教室に行くこととした。前に一回姉さんにご飯を作つてもらつたことがあつたが姉さんのご飯は本当にひどい。どんな特殊配合をしたらあんな味になるのだろうか。一度調理過程を見てみたい気がした。一見おいしそうに見えるから余計たちが悪い。そんなことを思いながら指定された教室に來た。

教室には会議用の長テーブルに座つた姉さんがいた。教室にはなんだか色々な機材が見える。マイクとかなんだかよく分からぬ放送用の機材みたいなのがいっぱいあつた。それとノートパソコンがあつた。

「星矢。よく來たわね。姉さんうれしい

「それより姉さんこれは何なんですか？」

僕は教室の周りにある怪しげな機材やコードを指さした。姉さんは席から立ち上ると満面の笑みで僕の方にやつてきた。僕は嫌な予

感しかしなかった。

「これからやることに必要なのみ」

「これからって何をするんですか？」

「同好会やるって言つたでしょ。まあ見てて。見てて。入つて来ていいわよ！」

姉さんがそう言つと教室の後ろから人が入つてきた。僕は入つて来た人のその異様さに度肝を抜かれた。男子用の制服を来た男の子と女子用の制服を着た女の子が1人ずつ入つて来たのだが顔はなぜか黒子が被つている頭巾を被つて顔を覆つっていたからだ。

「あの姉さん……。の方たちは」

「黒子AとBよ。」からの部活のサポートをしてくれるの。ビックリいでしょ」

思わず敬語になつてしまつたが面白いでしょと同意を求められても困る。その黒子AとBは長テーブルを基点にして右に一人、左に一人と鎮座した。

「それで結局何をするんですか？」

「まあいいからその前にここに座つて。座つて」

僕は先ほど姉さんが座つていた長テーブルに置かれている椅子に座らされた。姉さんが隣に座つた。前を見ると僕と姉さんの前にはマイクがあった。

「それじゃ始めるね。黒子AとB用意はいい？」

「そう言つと黒子A（男の方）はパソコンの前に座り、黒子B（女の

方)は姉さんの背後の方にしゃがんだ。

「むちやぶり同好会スタートです」

そういうことどこのからかラジオでよく聞くオープニングのBGMが流れた。僕が動搖していると姉さんが喋りだした。

「ここにちはー むちやぶり同好会が始まりました。このむちやぶり同好会は校則の限界に挑戦していこうと、私と弟の同好会です。それでは早速多数の手紙とメールが届いてますので読みますね」

「ちよ。ちよっと姉さんこれは何ですか?」

ラジオのリスナー口調で喋っているノリノリの姉さんを僕はとりあえず遮り、このなんだかよく分からぬ流れを止めるにした。

「何つてむちやぶり同好会のWebラジオよ。つていうか今収録してるんだからね。急に変なこと言こ出すはないでよ。そうよー。黒子A」

黒子Aは無言で頷いた。いつたいこいつは誰なんだ。というか見たことあるめにこいつは。顔は隠れているが俺の親友の弾打弾だんだんだつた。

「お前弾だろ? 何やつてるのこんなとこひどい

黒子A(弾打弾)は首を横に振つて必死に否定したがその否定の仕方が余計に弾だといつことを証明していた。僕はその頭巾を外しに行こうと思った。

「ダメよ。黒子に話かけちや」

最初に話かけたのは姉さんだつたような気がしたがとりあえずそこは突っ込まないことにした。そうするともう一人の黒子B（女の子の方にも見覚えがあるような気がした。名前は知らないけど確か姉さんの友人の一人だつたような気がした。

「黒子AのおかげでWebラジオを配信することになりました。ねえー。黒子A」

「姉さん思いつきり話かけてるじゃないですか！」

黒子A（弾打弾）は頷いて後ろからパネルをだした。そのパネルには「喜んで」と書いていた。喋れよと思ったが喋らないことにしているのかと思った。なるほど確かに黒子A（弾打弾）は放送部員でネット関係にも強かつたので恐らく姉さんから無理やりか何か弱みを握られてこんなことをさせられているかもしれないと僕は予想した。姉さんならやりかねない。

「もう一度説明しますね。むちやぶり同好会（弟君をいじりたおそう会）とは校則の限界に挑戦する同好会です。みなさんからの熱いお便りから厳選してそれを我が弟が挑戦するという画期的な同好会です」

自分で画期的とか言っちゃてるよと思つて内心ニヤニヤしていたのだが聞き逃せないキーワードが出てきた。

「姉さん！姉さん！何か聞き捨てならない」とが聞こえました
が僕が何をするんですか？」

「もう！今収録してるって言つてるじゃない。まあいか別に。
言葉の通りよ。星矢が校則の限界に挑戦するのよ」

「姉さん！ 僕絶対やりませんからね」

「さてこのうるさい弟君はさておいて、多数の手紙とメールが届いてます。みんなありがとー」

「そんなこといつやってたんですか？」

「見なかつたの？ あつたじやない教室に。あなたのお声をお聞かせくださいっていう箱が」

「え！ そんなのありました？」

僕は考えてみた。箱。箱。確かにあつたかもしれない。ある日突然金ぴかな怪しげな箱が教室に置かれていた気がした。

「それでは記念すべき第一回のお便りを読みますね」

姉さんがそう言つと黒子Bがどこからか箱を持ってきて姉さんに渡した。

「黒子Bありがとー」

姉さんは受け取った箱の中をかきまぜた。しばらくかき混ぜて箱から一枚の紙を取り出した。

「ええとですね。 在住の弟大好きお姉ちゃんさんからです。あ。これ私が書いたのだ」

「ええとですか。 一枚しか入っていないんじゃないかと思つたがそれよりもその内容に度肝を抜かれた。

「ええと。何なに。私のやつて欲しいのはコスプレ登校です。特にメイドなんて大好物です。そのままだと絶対アウトだと思うのでメイドのカチューシャを着けて登校なんてどうでしようか？ いいア

イデアではないでしょうか。それではお体にお気をつけください。

だつてー」

「だつてーじゃないですよ。何で姉さんは自分に対して手紙を出すんですか」

「その方が面白いじゃない。よし。これに決めたつと。記念すべき第一回は「メイドのカチューシャで登校できるか!」です。結果も報告するから楽しみにしててね。ではまたねー これからもメールやお手紙待ってるからね」

「姉さん! うまく纏めようとしますけど僕は絶対やりませんからね」

「またねー」

ちやぢやぢやぢやぢやひーん

終わりのBGMのようなものが流れてどいつやひー姉さんが「ラジオと言
い張つてこむものは終わつたよつだた。

「あー。終わつた。うまくできたかな? 黒子A、B」

黒子Aはパネルで「素敵でした」と書いて出した。黒子Bは頷いた
だけだつた。

「姉さん。僕は絶対そんなことやりませんからね」

「えー。もしかして。猫耳の方が良かつた。そつちだつたかー。姉
さんニアミスしちやた」

「そつちでもありますんよー とにかく僕はやりませんからねー」

そつちで僕は姉さんを置いて先に家に帰つてその日は誰にも会
たくなかつたのでそのまま飯も食べないで寝てしまつた。

朝起きたら頭に異変を感じた。触つてみるとなんだか頭の上に何かが乗つかつているようだつた。自分の部屋にある鏡を見てみるとメイドさんが着けているようなフリフリのカチューシャが頭の上に着いていた。姉さんだなと思つて外そうとしたがなぜか頭から外れなかつた。

「え！　え！　……。　なんで取れないの。　嘘」

どんなに引っ張つても取れなかつた。「呪いのメイドのカチューシャ」とかいうアイテムなのかとくだらない考えがよぎつたがとにかく原因は姉さんだと思つたので下に降りて姉さんを問いただすことにして。

下の居間に降りると姉さんは起きて朝ごはんを食べていた。僕を見つけると皿を輝かせて「ひっさつ」した。

「きやああー。かわいい。母さん見て。見て。星矢すくかわいくなつてるよー」

その声を聞いて台所から母さんが出てきた。姉さんはとこつと僕の頭のカチューシャを撫でていた。

「あら。星矢。すくかわいいわよ。これからずっとそのままいたほうがいいじゃない？」

などととんでもない」とを言つていた。

「姉さん。それよりもなんでこれ取れないんですか？　どんな魔法を使つたらこんなことができるんですか？」

「え！ ああ。それはね。あるルートから仕入れたのよ。いいでしょ。絶対星矢外そうとするだらうからお姉ちゃん奮発しちゃつたよ」「なんでそんなものに奮発するんですか。姉さんは……」

たぶんあるルートとはネットオークションだと思つただれど今のオークションはこんな危ないアイテムまで出品しているのかと思ってため息が出た。視線をあげると黙つて新聞を読んでいた父さんと目があつた。僕は父さんに助け船を出すことにした。

「父さんも何か言つてくださいよ。息子をこんな格好で表に出していいんですか？」

「……。星矢よ。男は諦めも肝心だぞ。すまん」

そう言つと父さんは泣きながら味噌汁をすすり出した。この家にはどうやら僕の味方はいないようだつた。

「大丈夫。姉さんが学校まで一緒に着いていてあげるから。うれしいでしょ」

「うれしくないですよ。それよりもこれ外してくださいよ」

「うれしいくせに」「うううう」

姉さんはそう言いながら肘で僕のことを小突いて來た。もうどうにでもなれと思って。朝食を食べて姉さんと一緒に登校することにした。

道行人の視線が明らかに僕の頭の上に行つているのを感じながらなんとか学校までたどり着いた。姉さんは始終ご機嫌だつた。学校では明らかに引いている人、ひそひそと話をしている人、写メを撮る人など色々だつた。姉さんの友達は姉さんの友達らしい反応で「かわいいー」とか言いながら頭を撫でたり写メを撮つたりして

いた。悪い気はしなかつたがいい気もしなかつた。

「絶対外したら駄目だからね。絶対だよー」

姉さんは学年が違うので途中で別れることになるのだが分かれる時にそんなことを言っていた。外したら駄目じゃなくて外れないんですねと僕は叫びたかった。姉さんは僕が見えなくなるまで廊下で立つて見守つていたようだつた。

僕は今までの人生の中で一番の緊張で自分の教室に入った。入ると一斉に視線が僕に集まつた。どうやら噂がもう広まつているようだつた。一斉にみんなが視線を逸らしたのクラスメイトはとりあえずスルーすることで同意したようだつた。僕は親友？の弾打弾を探した。アイツが悪い訳ではないがとにかく僕は誰かに文句を言いたかつた。弾は自分の机に突つ伏して寝たふりをしていた。

「弾！ 顔をあげてくれ。言いたいことがある」

「すまん。俺はお前の親友としてお前の不憫な姿は見れん。許してくれ」

「弾！ 弾！ 弾！ 賴むから顔をあげてくれ」

弾をこれでもかと揺すつたが弾は顔をあげることはなかつた。そうしていると担任の先生がホームルームをするために入ってきたので僕は仕方がなく座ることにした。

先生は朝の適当な話題を話してから朝の出席確認をした。そして僕の番までやつてきた。

「鏡橋

「はい……」

「鏡橋それは……」

といつて止まる36歳（独身）の僕のクラスの担任。生徒からまずまでの信頼と尊敬を持たれている黒縁眼鏡の社会科男性教師。先生は眼鏡を持ち上げて怪しく光させてこちらをじっと見ていた。

おそらく先生は普通の帽子だつたら取りなさいと注意するだろうが予想を超えたメイドのカチューシャにものすごく悩んでいたようだ。教室の中にこれはアウトなのかセーフなのかという空氣でいっぱいになつた。5秒か10秒くらいだつたと思ったが僕はえらく長く感じた。

「木村」

「……」

「木村居ないのか？」

「あ。はい！　います」

結果は先生は次の人の名前を呼んでそのまま続行された。「うわー。スルーなんだ」という空気が流れた。先生の中で無かつたこととして処理されたのだろうか。先生は顔をポーカーフェイスで固めていてよく分からなかつた。

そのあと先生はえらく連絡事項を噛んだり、同じことを何回も言つたりしたりして教室から出るときも教室のドアに頭をぶつけながら出て行つた。たぶん先生は余程動搖していたのかもしれない。

僕は休み時間は僕に捕まらないようにどこかに姿をくらませていた。僕はできるだけ人目に触れないようにじつと自分の教室に座つていった。休み時間ごとに誰かが見学に来るので僕の神経は折れそうになつたが何とか耐えた。昼休みには姉さんが友達を大勢連れてきて様子を見に來た。僕が頭にカチューシャを着けていることに喜ぶと散々いじりたおして昼休みいっぱいまで僕の教室に居座つた。僕は一日さらし者の状態だつた。僕はなんとか精神を保ち、耐えた。そしてやつと放課後になつた。急いで帰ろうかと思って走つて教室から出たが姉さんが教室の外の廊下で待ち構えていた。

「逃がさないわよ。星矢。今日の結果報告のラジオがあるんだからね」

「姉さん。頼みますから今日は帰らせてください」

僕は泣きながら懇願したが姉さんは「わかった。わかった。帰りにアイス買ってあげるから後ちょっと我慢してね」と言いながら僕の首根っこを掴んで引きずるようにして昨日の教室まで連れて行かれた。

昨日の教室に入るとすでに黒子AとBが待機していた。

「弾！ お前覚えてるよ」

僕は普段言わない声を出して弾を攻めた。弾はといつとうなだれてパネルに「すまん」と一言だけ書いて返事をした。こいつはどんな弱みを握られているのだろうか。その行動が余計に僕の神経を逆なでしたが僕はそのまま昨日の長テーブルの前に座らせられた。

ちゅうやくちゅうやくちゅうやくちゅうやく

昨日のOPのBGMが流れでラジオが始まった。

「じたにちゅー。むちゅぶり同好会スタートです まず星矢よくやつた。お姉ちゃんはうれしいぞ。こんな弟を持つて誇りに思ひ。みんなはくしゅー」

黒子AとBがぱぱぱらりと拍手をしてくれた。全然うれしくなかつた。

「それでどうだった。星矢。今の率直な感想をどうぞー。」

「……」

「どうやら感動して言葉にならないみたいですね。かわいやつめ。」
「こつめ」

その言いながら僕の頭を撫でだした。僕は乱暴に振り払った。一瞬姉さんの顔に憂いが見えたがすぐにいつもに笑顔に戻して小さくごめんねと言つたような気がした。

「では結果はつぴょおおー。むちやぶり同好会（弟君をいじりたおそう会）。第一回「メイドのカチューシャで登校できるか！」でしたが結果はなんと。でれでれでれ。ギリギリセーフでしたあー。いやー。やれるもんですねえ。黒子Aどうですか？」

黒子Aはパネルに「弟はよくやつたよ。見直した。男を上げたよ」と書いて出した。

「んー。黒子Aも大絶賛みたいですねー。じゃあ黒子Bどうでしたか？」

黒子Bは無言で立ち上がり拍手をした。スタンディングオベーションですか。そういうですか。

「おーと。黒子Bからはスタンディングオベーションをいただきました。うん。我が弟はよくやりました。それにはお姉ちゃんも同意します。みんなも良かつたらチャレンジしてみてね」

「さて、むちやぶり同好会では星矢にやつて欲しいことをみんなの手紙やメールで広く募集しています。みんな待ってるよー。星矢からは何かある?」

「……」

「何も無いやつですー。」の照れ屋さんめー」

募集しているところ」とせかれいもすと今日のよつなことが続くのだろうか。俺はどん底に突き落とされたような気持ちでいた。黒子Bを見ると「頑張れ!」というパネルを掲げていた。なんだかいちいちイライラするんだよなそれ。

「では最後に私から一言。これ星矢にだけ言つてなかつたんだけど……。私と星矢って血が繋がっていないんだよね……。ではまた来週

まつたねえー」

「えー! それってどういふこと? 姉さん答えてよー」

姉さんを揺すつて聞いたが姉さんは答えてくれなかつた。姉さんは遠い目をして手を一所懸命振つて笑いながら涙を流していた。それだとなんか本気くさいじゃないですか。姉さん。

「またねえー」

ちやうやうやうやうやうやう

「ね。姉さん。どういふことですかー。」

(後書き)

読んでいただけた方、「拝読ありがとうございました。」

部活 + 弟好きな姉 + 何か面白そうなシステムで考えていたらこんな話が思いつきました。自分は書いていて楽しかったので面白ければうれしいです。

ここまで読んでいただけた方、どうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9731g/>

むちゃぶり同好会(弟君をいじりたおそう会)

2010年10月15日20時17分発行